

身体部位詞を含む慣用表現に関する 認知言語学的研究

——首と neck の比較を中心に——

森 薫 葉

1. はじめに

我々が普段使う言語の中には、身体部位を何かに見立てた比喩表現が多数存在する。例えば、出口、釘の頭を打つ、腹がたつなどである。これらは、それぞれ場所、物体の部分、感情を、身体部位の一部に例えて比喩的に表現されている。比喩的に、といっても、これらの表現は、多くの場面で使われ続けてすでに定着しているので、修辭的に表されているという意識は話者にはないだろう。本稿で扱う「首」という身体部位を含む慣用表現には、例えば、首が繋がる、首を長くして待つ、首を振るなどがある。これらの表現において構成語「首」の意味は、本来指示する身体部位の意味から明らかに拡張していたり、慣用句全体の意味は、個々の構成語で文字通りに表される意味から拡張していると言える。

この研究は、日本語と英語の身体部位詞「首・neck」を考察の対象として、日英慣用句の中でこれらの構成要素がどのような比喩的意味を示しているか、また、「首・neck」の文字通りの意味がどのように拡張して、その慣用句の意味を表すようになったかを明らかにすることを目的とする。その上で、日英それぞれの言語の「首・neck」を含む慣用表現に、どのような共通点や相違点が認められるかを記述する。構成要素「首・neck」や慣用句全体の比喩的意味がどのように生じたかについては、メタファー、メトニミーなどの認知言語学の枠組みを用いて説明する。

2. 先行研究

2.1. 認知言語学とは

認知言語学とは、「認知」との関連でことばを研究していく学問である（野村，2014，p.9）。ここで言う「認知」とは、目の前の事態が〈意味〉をもって立ち現れる（＝世界がわかる）ことを可能にする心の働きである（野村，2014，p.9）。世界の事物が〈意味〉

をもって立ち現れるとは、例えば、同じ部屋に人間と犬とハエがいたとして、本棚は人間にとって〈読書〉の意味を持つが、犬にとっては壁と同様〈障害物〉としてしか立ち現れない。人間にとって〈歩行〉の意味を持つのは床だけだが、ハエにとっては床のみならず、椅子、本棚、机も〈歩行〉の対象として立ち現れる（野村，2014，p.3）。つまり世界が〈意味〉を持って立ち現れるとは、目の前の事物を何らかのカテゴリーへ分類した結果であると言える。世界が〈意味〉をもって立ち現れることはどの生物にも共通であるが、人間が他の生物と異なるのは、世界の立ち現われには大抵ことばが伴う点である（野村，2014，pp.3-4）。上の例のように、生物は自分を取り囲む環境に意味を与えることによって主体的にそれぞれの世界を構築しているわけだが、人間の場合、世界を構築するにあたってことばが大きな役割を果たす（野村，2014，pp.5-6）。野村（2014，p.6）は、「ことばを身に付けるとは、世界をその言語の仕方¹で切り分けることによって、世界が分かる（＝〈意味〉として立ち現れる）ようになることにほかならない」という。世界が〈意味〉として立ち現れるには、感覚、知覚、注意、記憶、推論、比較などの認知能力が必要である（野村，2014，p.9）。そして人間の場合、〈意味〉の立ち現われにことばが伴う。つまり、言語は他の認知能力と協働して、世界に意味を与え、世界を理解する役割を果たしている（野村，2014，p.9）。これはすなわち、さまざまな言語現象、意味を表す仕組みは、他の認知能力を基盤として出来上がったものであり、感覚、知覚、注意、記憶、推論、比較などの一般的な認知能力が反映されているはずだと考えられる（野村，2014，p.10）。認知言語学はこのような言語観を持つために、言語に特化しない一般的な認知能力を説明原理としてさまざまな言語現象を分析する（西村，2015，pp.176-177）。このような認知言語学の立場に立って、本稿で問題とする、語や句のレベルでの意味拡張と、拡張した動機も含めた説明を試みる。とくに、認知言語学には、メタファー、メトニミー理論の研究の蓄積が多く、本稿で扱う問題の説明に非常に有効だと考える。

2.2. 比喩とは

山梨（1995，p.20）によると、それまでの言語学の研究では、比喩は主に修辞学の領域に関わる問題として軽視され体系的な研究はされていなかったが、我々が日常で使う言語の中には、比喩という現象を考慮しなければ、一般的な記述・説明が不可能な現象が広範囲に存在するという。つまり比喩とは単に、詩の中でことばを美しく飾ったり、政治家がより説得力や印象を強めるために使ったりすることばの綾ではなく、普段我々が

使っていることばの中にあふれた現象なのである。例えば、中華料理の食材としてよく使われる「キクラゲ」というキノコを、漢字では「木耳」と書く。キノコは「耳」でも「クラゲ」でもないのにこの名づけ方をした。つまり、「キクラゲ」という見たことがないものに出会ったとき、その人にとっては、それはキノコとして立ち現れたのではなく、外見が似ていて既に知っているものである「耳」や「クラゲ」として立ち現れたのだ。これは、未だ経験したことがない知らない領域のものを既に知っているものとしてみることで、世界を開き、理解させてくれる「比喩」の働きである（野村, 2014, p.39）。認知言語学では、言語は人間の物事を認知する（言語に特化しない）一般的な能力を反映した現象であると考えられる。比喩という現象も他のさまざまな言語現象と同様、人間の認知能力が根源にある、と考えるのであり、このことは2.2.1と2.2.2で詳しく述べる。

さらに、比喩は、意味変化・意味拡張の原動力としても働くという。我々の心に浮かんだ思いや、初めて経験する物事を表すのにぴったりなことばがいつも見つかるとは限らない。先の「キクラゲ」のように、よくわからないものに出会ったとき、よく知っているものを結びつけることによって何とか理解しようとしたり、手もちの語の意味をずらして何とか対処しようとしたりする（野村, 2014, p.65）。こうして、比喩的に伝達された表現の一部は、やがて定着し、文脈に関係なく、文字通りの意味の一部となる（山梨, 1995, p.57）。語の意味変化とは、このように意味のずらしが定着することに他ならない（野村, 2014, p.65）。本稿で扱う「首・neck」という語彙の多義や、「首・neck」を含む慣用表現の意味も、この種の意味拡張のプロセスを経て生じたものと考えられる。比喩はメタファー、メトニミー、シネクドキなどの種類があるとされるが、本稿ではそのうちのメタファー、メトニミーを扱うためこの2つについて以下で詳述する。

2.2.1. メタファー

朔山（2009）は、メタファーを「2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、本来は一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩」と定義する。メタファーとは、抽象的であったり、経験したことがなかったりする捉えにくい対象を、お互いが共通に知っていると思われるより具体的でわかりやすいことにたとえて理解しようとするプロセスであり、それは、複数の物事を比較し、類似性を見つけるという人間の能力に基づくと考えられる（山梨, 1995, p.20）。以下に具体的なメタファーの例を挙げる。

メタファーの例

- (1) 「食べ過ぎてブタになってしまった」
- (2) 「あの人に比べたら、私などまだまだヒヨコです」
- (3) 「あの方はお天気屋だから付き合いにくい」

(昀山, 2009, pp.26-27)

(1) の例における「ブタ」は、「ブタのお腹が出ている体型」と、「食べ過ぎて太った姿」の間に認識した外見の類似性を基にしたメタファーである。(2) の例の「ヒヨコ」は、本来の意味である「ニワトリの雛」と、この文における「一人前になる前の段階の人」との間に認識した、「成長の初期段階にあるもの」という抽象的な類似性を基にしたメタファーである。(3) は、私たちの経験に基づく「日本の天気は一般に変わりやすい」という知識と、「気分がわりやすい人」との間にある「わりやすい」という共通点を認識したメタファーである (昀山, 2009, p.26-27)。

2.2.2. メトニミー

メトニミーとは、「現実世界において際立って見えるものを見たまま表現することで、それと隣接関係にあるものを指す比喩」である (野村, 2014, p.58)。隣接関係とは、複数のものが空間的に接している関係や、複数の出来事が同時に起こったり、連続して起こったりしている関係である。以下にメトニミーの例をあげ説明する。

メトニミーの例

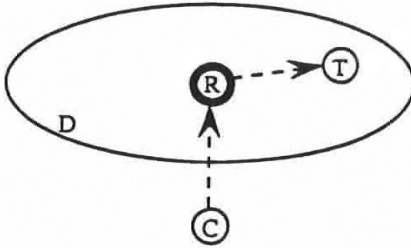
- (4) 「赤ずきんは元気よくおばあさんの家へ出かけました」 (著者作例)
- (5) 「あの金髪失礼だ」 (著者作例)
- (6) 「手が足りないから、手伝って」 (昀山, 2009, p.31)
- (7) 「ユニホームを脱ぐ」 (昀山, 2009, p.31)
- (8) 「頭を抱える」 (昀山, 2009, p.31)
- (9) 「親の言うことを聞く」 (昀山, 2009, p.32)
- (10) 「村上春樹を読む」 (著者作例)

(4) について、ここで言う「赤ずきん」は赤いずきんそのものではなく、「赤いずきんをかぶった女の子」を指している。この時「赤いずきん」と「赤いずきんをかぶった

女の子」の間には空間的な隣接性がある。同じような例は(5)である。この場合「金髪」で「金色の髪色をしている人」を指しているが、髪の手と人は隣接しているというよりは、金髪はその人の一部である。これら2つの例、(4)の「赤ずきん」と(5)の「金髪」を別の種の現象とは呼びにくいから、メトニミーには隣接性に加え、部分—全体の関係に基づく比喩も含まれる。(6)の表現も、「手」で「(手を部分として含む)人間の体全体」を表していることから、部分と全体の関係という空間的な隣接関係の特殊な場合のメトニミーである(舩山, 2009, p.31)。

(7)、(8)、(9)は時間的な隣接性に基づくメトニミーの例である。(7)は「プロをやめる」という出来事の一部に「ユニホームを脱ぐ」という行為がよく含まれることがあることに基づく表現である。つまり、「ユニホームを脱ぐ」と、「プロをやめる」ことが同時に生じることに基づき、本来は前者を表す表現で、後者を表すこともできる(舩山, 2009, p.31)。(8)についても同様のことが言える。さらに、(9)は2つの出来事が連続して生じる時間的隣接性に基づくメトニミーである。「言うことを聞く」は、文字通りには、「相手の言葉を聴覚で捉える」という意味だが、(9)の場合、それに連続して「言葉の内容に従う」ことが生じるのが普通である。よって、本来は先行する出来事を表す表現で、後続する出来事を表すメトニミーである(舩山, 2009, p.32)。

メトニミーは参照点能力という認知能力に基づくと考えられる(舩山, 2009, p.32)。参照点能力とは、図1でラネカー(Langaker, 1993, p.6)が示すように、本来指示したりアクセスしたいある対象(=標的 target, T)にたどり着くために、まずは、より目立つアクセスしやすい対象(=参照点 reference point, R)を経由したりする能力である(西村, 2015, p.100)。これもまた、言語に特化した能力ではなく、日常で普通に使われる心の働きである。例えば、先週の土曜日の夕食は何かとたずねられたとき、その献立を直接思い出すというよりは、その日の予定はどうであったか、誰といたかという、より思い出しやすいポイントへ最初にアクセスすることはよくあることだ。この場合土曜日の夕食の献立がT、思い出す手がかりにしたその日の予定と一緒にいた人はRという関係が成り立つ。メトニミーの例として他にも(10)「村上春樹を読む」がよくあげられるが、これについても、「村上春樹」がR、「村上春樹の作品」がTという関係が成り立つ。



——Langacker (1993: 6)

図1 参照点能力

2.3. 慣用句の分類について

2.3.1. 石田 (2015) による慣用句の分類

石田 (2015) は、慣用句の定義とその範囲について、今のところ決定的なものがなく、慣用句と一般連語句の境界線ははっきりとは引けないことに言及した上で、宮地の慣用句の定義「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉である」(宮地, 1982, 石田, 2015, p.19より引用)を採用する。その上で、慣用句には慣用句らしい(典型的な)慣用句から周辺的な慣用句までであると考え、その慣用句らしさの度合いは、「形式的固定性」「統語的固定性」「意味的固定性」の3つの性質の度合いを計ることで明らかになるという。「形式的固定性」「統語的固定性」「意味的固定性」は慣用句の性質であるとされるが、絶対的な特性ではなく、慣用句の相対的な「慣用句らしさ」を明らかにするための有効な指標であるという。

1つ目の「形式的固定性」とは、「慣用句には一般に、構造が変化したり、構成語が省略または付加されたり、他の語に入れ替えられたりすることがない」(石田, 1998, p.44, 石田, 2015, p.23より引用)という性質であるという。例えば、

- (11) お茶をにごす → × 煎茶を濁す
- (12) 根も葉もない → × 葉も根もない
- (13) lend a hand (お手伝いする) → × borrow a hand

(石田, 2015, p.23)

ところが、先にも述べたように、「形式的固定性」は絶対的な特性ではない。例えば、

- (14) 陰口をきく→○陰口をたたく
- (15) 手を抜く→○手抜き
- (16) keep one's cool →○ lose one's cool (冷静さを保つ/失う)
- (17) throw in the towel →○ toss in the towel (あきらめる)

(石田, 2015, p.24)

これら慣用句と呼ばれる表現について、形式的な変化はあるものの、共通の部分が多く対応関係にあるといえる表現のペアがある。石田(2015)はこのような表現のペアを「慣用句の変異形」と呼び、個々の慣用句に「変異形」が存在するかどうかを基準として、その慣用句の「形式的固定性」の度合いを判断するという。

2つ目の「統語的固定性」とは、「慣用句が文の中で用いられる際に文法的な変化をあまり許さないという特性」であるという。例えば一般の動詞句は、

- (18) ドアが閉まる→○閉まるドアにご注意ください
- (19) shoot the deer (鹿を撃つ) →○ the deer was shot (撃たれた鹿)

(石田, 2015, pp.54-55)

というように名詞句に転換されたり、受身表現にされたりするのに対し、慣用句は、

- (20) 犯罪に手を染める→×犯罪に染めた手は...
- (21) John and Jim shot the breeze (ジョンとジムはおしゃべりをした)
→× The breeze was shot by John and Jim

(石田, 2015, pp.54-55)

というように文法的な変化はあまり許さない。しかしながら、「統語的固定性」もまた、慣用句の絶対的な特性ではない。その程度は「名詞句への転換」「連体修飾語の付加」「連用修飾語の挿入」「命令表現化」「意志表現化」「受身表現化」「敬語表現化」「肯定・否定表現化」などといった文法的操作の可否によって計られるという。さらに、この「統語的固定性」は、慣用句のもう一つの性質である「意味的固定性」と密接な関係があるという。

「意味的固定性」とは、「句全体の意味が句を構成する個々の語の意味の総和と一致しない慣用句の特性」であるという。この特性も個々の慣用句によってその度合いは異な

る。例えば、「頭にくる」という表現の「かっとなる」という意味は、その構成語句である「頭」「に」「くる」の通常の意味や、これらの構成語間の文法的な関係からは導き出せないため、「意味的固定性」の度合いは高いという。この「意味的固定性」の度合いは、客観的に判断しやすい「統語的固定性」の度合いに反映されるという。つまり、先に触れた「統語的固定性」の程度を判断するための統語的操作は、「意味的固定性」の度合いを計る手段としても有効であるという。

- (22) 「目を向ける」 → (名詞句へ転換) ○ 「鈴木へ向けた目は…」
→ (形容詞の付加) ○ 「恨めしそうな目を向けた」
→ (副詞 (句) の挿入) ○ 「目をくると信夫に向けた」

(石田, 2015, p.114)

例えば、(22)「目を向ける」は上記のような統語的操作が可能であり、このことは「目」や「向ける」という構成語が慣用句の中で解釈可能な意味を表していることを示唆するという。

- (23) 「頭にくる」 → (名詞句への転換) × 「きた頭/きている頭」
→ (形容詞の付加) × 「大きな頭にくる」
→ (副詞 (句) の挿入) × 「頭に完全にくる」

(石田, 2015, p.113)

一方で、(23)「頭にくる」は上記のように、名詞句への転換、形容詞の付加、副詞 (句) の挿入などの統語的操作を許さない。「統語的固定性」が高いことは、(形式だけでなく) その意味も1つのかたまりとして固定しており、「頭」や「くる」といった個々の構成語が解釈可能な意味を持たないためであると思われるという。つまり、統語的操作 (名詞句への転換、命令表現化、意志表現化、連体修飾語の付加、連用修飾語の挿入) の可否を調べることで、慣用句の個々の構成語の意味が解釈可能な意味を表しているかどうかや、個々の構成語の意味が句全体も意味の一部として含まれているかどうかを確認できるということである。

2.3.2. 伊藤 (1997, 1998) による慣用句の分類

伊藤 (1997, 1998) は、身体部位詞を含む慣用句の日独対照研究をしている。伊藤 (1998) は身体部位詞「手・Hand」を考察の対象として、日独慣用句の中でこれらの構

成要素がどのような比喩的意味を示しているか、また、それぞれの言語の慣用句では、比喩性についてどのような類似点、相違点が認められるかを明らかにすることを目的としている。その方法として、まず、構成要素の表す意味と慣用句全体の表す意味との関係を次の3タイプに分類する。

1. 構成要素の比喩的意味に基づいて慣用句全体の表す意味が生じている場合。
2. 構成要素の比喩的意味ではなく、もっぱら慣用句の表す具象性に基づいて慣用句全体の意味が生じている場合。
3. 構成要素の比喩的意味と慣用句の具象性の両者が関与して慣用句全体の意味が生じている場合。

(伊藤, 1998, p.766)

伊藤は1.の構成要素の比喩的意味に基づいて慣用句の意味が生じている例として以下をあげる。

[1.の慣用句の例]

(24) 手がない

不満に思うかもしれないが、あの状況では、こうするよりほかに手がなかったんだ。

(井上, 1992, p.266, 伊藤, 1998, p.766より引用)

この文脈の中で、「手がない」という慣用句は、「ほどこす手段・方法がない」という意味を表している。ここでは、構成要素「手」は、「手段・方法」という比喩的な意味を表していると考えられ、この構成語の比喩的意味に基づいて慣用句全体の意味が生じているといえる。このことは、構成要素「手」を「手段・方法」と置き換えた「手段・方法がない」が、そのまま慣用句「手がない」の表す意味と見なすことができるということから確認できる。

2.の構成要素の比喩的意味ではなく、もっぱら慣用句の表す具象性に基づいて慣用句全体の意味が生じている例には以下のようなものがある。伊藤は、慣用句の具象性とは、慣用句の構成要素として用いられている語句の文字通りの意味により示されていえる事柄と定義する。このタイプの慣用句では、構成要素に比喩的な意味は認められず、あくまでも構成要素の文字通りの意味で示されている事柄に基づいて慣用句全体の意味

が生じていると考えられる。以下で2の慣用句例と（ ）内で慣用句の意味をあげる。

[2.の慣用句の例]

(25) 手が後ろに回る（悪いことをして逮捕される）

（伊藤，1998，p.772）

(26) 手を上げる（降参する、なすすべがなく途中で投げ出す）

（井上，1992，p.430，伊藤，1998，p.772より引用）

(27) 手も足も出ない（自分の力を遥かに超えていえるので施すべき手段が全く見つからず困り果てる）

（伊藤，1998，p.772）

(28) 手を出す（あることに干渉する、関わりを持つ）

（毎日新聞，1996.7.20朝刊，p.10，伊藤，1998，p.773より引用）

(29) 手を結ぶ（協力し合う）

（毎日新聞，1996.8.23朝刊，p.8，伊藤，1998，p.773より引用）

(30) 手が長い（盗み癖がある）

（井上，1992，p.294，伊藤，1998，p.772より引用）

これらの例は、構成要素「手」が慣用句の中で担っていると考えられる比喩的意味から慣用句としての意味が生じているのではなく、構成要素の文字通りの意味によって示されている事柄に基づいて、慣用句的な意味が導き出されている。例えば、(25)「手が後ろに回る」では、悪事をしてつかまり、後ろ手に手を縛られているという具象性が示されている。この具象性に基づいて、慣用句全体の意味が生じていると考えられる。

(26)「手を上げる」、(27)「手も足もでない」、(28)「手を出す」、(29)「手を結ぶ」などの慣用句は、構成要素「手」を用いた行為が、(30)「手が長い」は構成要素「手」という身体部位の「長い」という特徴が示されており、この具象性に基づいてそれぞれの慣用句としての意味が生じている。著者はこれを、句全体で表される文字通りの意味がメタファー、メトニミーにより拡張され、その慣用句の意味が生じているものと解釈する。

最後に3.の構成要素の比喩的意味と具象性が関与しているタイプの例として、以下をあげる。このタイプの慣用句では、「手」という中核的な構成要素の比喩的意味だけではなく、それ以外の動詞などの構成要素もある種の比喩的意味を持っており、その両

者の結合から慣用句全体の意味が発生していると考えられるという。

〔3.の慣用句の例〕

(31) 手を打つ (必要な手段を講じて事がうまく運ぶようにする)

(毎日新聞, 1993.3.8, 夕刊, p.1, 伊藤, 1998, p.780より引用)

(32) 手に余る (力が及ばない、自分の能力ではどうにも処理できない)

(朝日新聞, 1997.1.13, 朝刊, p.1, 伊藤, 1998, p.778より引用)

これらの例は、1.のタイプの慣用句と同様、構成要素「手」にそれぞれ「手段・方法」や、「能力」という比喩的意味を設定することが可能であろう。ただしそれだけではなく、「打つ」、「余る」などの他の構成要素も、慣用句内ではそれぞれ「講ずる」、「～を超える」などという比喩的な意味を表している。その両者が結合することで、慣用句全体の意味が生じていると考えられる。

3. 研究方法

3.1. データの出典

本稿で扱う日本語の「首」を含む慣用表現は以下の文献から集めた。

梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明 (1989) 『日本語大辞典』 講談社

講談社辞典局 (2000) 『これは使える「体ことば」辞典』 講談社

東郷吉男 (2003) 『からだことば辞典』 東京堂出版

英語の“neck”を含む慣用表現は以下の文献から集めた。

多田幸蔵 (1981) 『英語イディオム事典〈身体句編〉』 大修館書店

J・ザイドル, W・マクモーディー著, 堀内克明訳 (1978) 『オックスフォード 現代イディオム活用辞典』 オックスフォード大学出版局

3.2. 分析方法

まず、上記の辞書などから集めた慣用句について、構成語「首・neck」の比喩的意味を分類する。その中には、構成語「首・neck」に比喩的意味があるわけではなく、「首・neck」はあくまで文字通りの身体部位を表している慣用句がある。これらの慣用句は、石田 (2015) の言う「意味的固定性：句全体の意味が句を構成する個々の語の意味の総

和と一致しない慣用句の特性」という性質に当てはまる。このような「意味的固定性」の比較的高い慣用句については、語レベルではなく、句レベルでの比喩的意味を分析する。句レベルでの分析の対象になる慣用句は石田（2015）の先行研究を用いて決める。2.3.1.で詳述したように、石田（2015）は、慣用句の「意味的固定性」の度合いは、統語的操作（名詞句への転換、命令表現化、意志表現化、連体修飾語の付加、連用修飾語の挿入）により計られると言う。集めた慣用句について、石田（2015）の統語的操作の可否を調べると、例えば以下ようになる。

首を長くする→（名詞句への転換）×長くした首
（命令表現化）×首を長くしろ
（意志表現化）×首を長くしよう
（形容詞の付加）×短い首を長くする
（副詞の挿入）×首をずっと長くする

このような、統語的操作をあまり許さないタイプの慣用句は、「意味的固定性」が比較的高いと言える。それはすなわち、句全体の意味が、句を構成する個々の語の意味の総和と一致しない特性が比較的高いため、慣用句における構成語「首・neck」の意味を取り出すことができないということを示唆する。そのため、語のレベルではなく、句レベルで表される比喩的意味を分析する対象となる。

このように分析した構成語「首・neck」や、句全体の比喩的意味を分類した上で、その比喩的意味は元の身体部位の意味からどのように拡張して生まれたものかについても考察し、メタファー、メトニミーを用いて記述する。そして最後に日本語と英語の慣用句の比喩的意味を比較し、相違点や共通点を明らかにする。

4. 「首・neck」の語源

4.1. 首・neck 部位の説明のためのメタ言語による定義

本題に入る前に、「首・neck」が身体部位のどの部分を指しているかを明らかにするために、メタ言語を設定する。メタ言語とは、言語を述べるための言語（稲垣，2015，p.218）で、今回の場合、対象言語（述べられる側の言語）が日本語と英語のため、それを述べるための言語（メタ言語）を英大文字で表記し区別する。

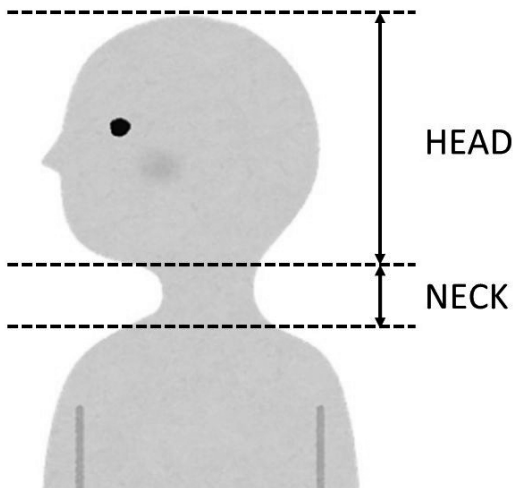


図2 首・neck 部位の説明のためのメタ言語による定義

[NECK] = 人や動物の頭と胴の繋ぎ目にあって、やや細くなっている部分

[HEAD] = NECK を含めず、そこより上の部分

4.2. 日本語の「首」の語源

まず、日本語の「首」が本来身体部位のどこを指し示すのかを明確にするために、語源を調べる。『日本国語大辞典』（2017年11月25日閲覧）に以下の5つの語源説がまとめられている。

- (1) クボミの約〔古事記伝・名言通・和訓栞・大言海〕。
- (2) クビレ（縊）の下略〔雅言考・言元梯〕。
- (3) キルヘリ（着縁）の反で衣装のクビから〔名語記〕。
- (4) カミフシ（首節）の義〔日本語原学＝林麿臣〕。
- (5) 「頸」の入声 Kup が Kubi と転じたもの〔日本語原考＝与謝野寛〕。

（『日本国語大辞典』（2017年11月25日閲覧）より引用）

方（2011, p.138）は、この5つの「くび」の語源説を根拠に、もともと日本語にある「くび」は[NECK]のみを指していたと説明する。方（2011）によると、日本語の「くび」は

その後、中国語の「首」という漢字が日本に入ってきたことが原因で [NECK] だけでなく、[NECK] + [HEAD] も表すようになったという。さらに、方 (2011, pp.137-138) は、中国語の「首」という漢字について次のように説明する。中国語の「首」はもともと [HEAD] の象形文字であるため、[HEAD] のみを指すという。この時点では、まだ「頭」という字はなかった。戦国時代になって「頭」という字が出現し、[HEAD] を表す字が2つ存在するようになった。その後『尚書』『世説新語』『水滸伝』と時代の異なる書物を対象に通時的な観点から「頭」と「首」の出現率を調べた結果、時代と共に、「首」は「頭」に置き換えられたという (方, 2011, pp.137-138)。方 (2011) は、この [HEAD] のみを表す中国語の「首」という漢字が、[NECK] のみを表す日本語の「くび」という語に当てられたことで、日本語の「首」はその両方の意味を表すようになったと説明する。

- (33) [安齋随筆 後編四] 軍物語の書に、首頭頸の三字を、クビと云ふ事に用いたり、首も頭もカシラとよむ

(『古事類苑人部 洋巻 第1巻』P.319より引用)

ただし、当時の人が中国語の「首」が [NECK] は示さず、[HEAD] だけを示していることを正確に認識していたかどうかは疑わしい。実際に (33) という記述がある。これを読むと、「首」「頭」「頸」の3つの字はどれも [NECK] を表すことができ、それらの漢字の発音も定まっていない様子である。つまり、隣接関係にあるそれぞれの部位をどのように切り分け、名づけるかが定まっていないように思われる。そのような段階を経て、その3つの漢字や発音の棲み分けが進み、現代に見られる形になっていると思われる。しかしながら、その棲み分けは完了していないため、「首」で [NECK] を示したり、[NECK] + [HEAD] を示したりと、「頭」と重なる部分も残っていると考えられる。

4.3. 英語の“neck”の語源

英語の“neck”の語源については、以下のような記述がある。

古英語 *hnecca* は「首の後ろ」と意味した。ゲルマン語起源で、オランダ語 *nek*「首」やドイツ語 *Nacken*「首筋」と同系である (『オックスフォード英単語由来辞典第2刷』)

他に『英語語源小事典第5刷』（1981）や、*Oxford Dictionary of Word Origins*（2010）にもまた、古英語 *hnecca* は「うなじ」「首の後ろ」を意味していたとの記述がある。よって英語の“neck”は本来 [NECK]の後ろの部分を表していたと考えられる。

5. 「首・neck」を含む慣用句の比喩的意味の比較

本章では、日英の「首・neck」を含む慣用句の比喩的意味を語レベル、句レベルで分析する。語レベルでは、慣用句において構成語である「首・neck」がどのような比喩的意味を表しているかを、句レベルでは、慣用句全体で表される文字通りの意味がどのような比喩的な意味に拡張しているかを明らかにする。また、語レベルでも句レベルでも、そのような比喩的意味はもとの意味からどのようにして生まれたかについて、メタファー、メトニミーの概念を用いて示す。そして日本語と英語の慣用句において構成語「首・neck」や慣用句全体の比喩的意味にどのような類似点・相違点があるか明らかにする。

5.1. 慣用句における構成語「首・neck」の比喩的意味（語レベルでの分析）

身体部位詞「首・neck」を考察の対象として、日英慣用句の中でこれらの構成要素が表す比喩的意味を分類すると以下ようになる。

I. 比喩的意味：命・職

[日本語]

- (34) a. 首をかける（命をかける、職を失う覚悟で物事を行う）
- b. 首が危ない（命が危ない、職を失うかもしれない）

(34) a. 「首をかける」は「命をかけて、職を失う覚悟で物事を行う」という意味を表している。「首をかける」の「首」を「命・職」に置き換えても同じ意味を表すことから、この慣用句において「首」は「命・職」という比喩的意味を表していると考えられる。

(34) b. 「首が危ない」についても同様のことが言える。本来身体部位の[NECK]を表す「首」が「命・職」の意味を表すのは、メタファーに基づく意味拡張であると考えられる。2.2.1.であげたメタファーの例（3）「あの人はお天気屋だから付き合いにくい」は、私たちの経験に基づく「日本の天気は一般に変わりやすい」という知識と、「気分が variability やすい人」との間にある「variability やすい」という共通点を認識したメタファーで

あった(羽山, 2009, p.26-27)。これと同様に、(34)「首をかける」や「首が危ない」は、「[NECK]は生命を維持する上で特に重要な身体部位である」という知識と、「命」との間に、「生命」という共通点を、「職」との間に「生命の維持を左右するくらい重要な機能をもつ」という共通点を認識したメタファーであると考えられる。つまり、「首」は慣用句において「命・職」という比喩的意味を表し、この比喩的意味は身体部位の [NECK] に関する「生命の維持を左右する機能を持つ」という知識との類似性を基にしたメタファーを原動力に意味拡張したと考えられる。

II. 比喩的意味：命

[英語]

(35) a. risk one's neck

(命をかける、命がけでやる)

b. save one's neck

(命拾いする、絞首刑をまぬかれる)

(35) a. risk one's neck は「命をかける、命がけでやる」という意味を、(35) b. save one's neck は「命拾いする、絞首刑をまぬかれる」という意味を表す。これらの慣用句において、“neck” は「命」という意味を表している。英語の“neck”が「命」を表すのは、日本語の「首」がそうであると同様であるが、日本語の「首」が「命」だけでなく「職」を表すのに対して、英語の“neck”はそこまで広く拡張していないという点で異なる。さらに、次の例で見ると、日本語の「首」は、「命、職」にとどまらず「解雇」という意味を表す点で、英語“neck”より明らかに広く意味が拡張していると言える。

III. 比喩的意味：解雇

[日本語]

(36) 首にする/首になる (解雇する/解雇される)

[英語]

なし

(36)「首にする/首になる」は「解雇する/解雇される」という意味を表し、この慣用句において「首」は「解雇」を表していると考えられる。本来身体部位の[NECK]を表す「首」が「解雇」の意味を表すのは、Iの比喩的意味「命・職」と同じく、「生命の維持を左右する機能を持つ」という百科事典的知識との類似性を基盤としたメタファーによる意味拡張である。IからⅢより日英慣用句を比較すると、身体部位 [NECK]のひとつの側面である、「生命の維持を左右する機能をもつ」ということを基盤にして意味が拡張しているという点は、日英の慣用句において共通しているが、どこまで広く拡張するかという程度は日英の間で差異が見られ、日本語の「首」のほうがより広く拡張していると言える。

IV. 比喩的意味：身体部位の[NECK]+[HEAD]

[日本語]

- (37) a. 首を出す
b. 首を引っ込める
c. 首が回らぬ
d. 首振り三年ころ八年
e. 首を傾げる
f. 小首を傾げる
g. 首を振る
h. 首を縦に振る
i. 首を突っ込む
j. 思案投げ首
k. 首をひねる
l. 首がすわる
m. 首が飛ぶ
n. 鬼の首を取ったよう
o. 首をあげる
p. 首狩り
q. 首実験

[英語]

なし

これらの慣用句において「首」は身体部位の[NECK]+[HEAD]を表していると考えられる。例えば(37)g.「首を振る」は身体部位の[NECK]+[HEAD]を左右に振るという文字通りの仕草を表し、その意味がさらに拡張して、「賛成しない、承知しない」という意味を表す。賛成しないことを示す仕草で「振る」のは、[NECK]だけではなくそれより上の部分すべてである。実際に英語では、同じ意味を“shake one's head”と、“head”（[NECK]+[HEAD]の意）を用いて表す。よって日本語の、本来身体部位の[NECK]を表す「首」は身体部位の[NECK]+[HEAD]の意味に拡張しているといえる。そのことは(37)の合計17個の例が示している。4.2.で詳述したように方（2011）によると、この意味拡張は、中国語の「首」という漢字が日本語の「くび」に当てられたことに由来するという。これもまた、身体部位[NECK]と身体部位 [NECK]+[HEAD]が部分—全体関係であるためといえる。日英の「首・neck」の表す比喩的な意味を比較して最も異なると思われる点は、この日本語の「首」が[NECK]だけではなく、[NECK]+[HEAD]も表すという点である。さらに、日本語の「首」は身体部位 [NECK]+[HEAD]を基にさらに広く拡張していることを続けてみていく。

V. 比喩的意味：最初

[日本語]

- (38) a. 首尾一貫
- b. 首尾よく

[英語]

なし

(38)「a. 首尾一貫」、「b. 首尾よく」はそれぞれ「初めから終わりまで、一つの方針、考え方で通すこと」、「初めから終わりまで良いぐあいに」という意味を表す。これらの慣用句の中で、「首」は「最初」という比喩的意味を表していると考えられる。これは身体部位 [NECK]+[HEAD]から拡張した意味であると考えられる。なぜなら身体部位 [NECK]+[HEAD]が体の上部にあるということ、「物事の最初」が抽象的な位置関係において「上」であることに「位置が上」という類似性があるからだ。「首」が「最初」を表すのは、そのような類似性を認知したメタファーによる拡張であると考えられる。この比喩的意味は日本語の「首」に特有であり、それは「首」が[NECK]+[HEAD]の意味へと拡張したことの延長線上にある現象であると考えられる。

VI. 比喩的意味：人全体、人数

[日本語]

- (39) a. 首を揃える（関係者が一堂に集う）
b. 雁首を揃える（人が集まる、整列する）
c. 鳩首会議（人々が集まって相談すること。多くの人が額を寄せて話しあう様子）
d. 首を吊る（自殺する。首をひもなどにつけ、高いところから吊り下がって、死ぬ）
e. 首投げ（相撲やレスリングの技の一種で、相手の首に腕を巻きつけて投げる）

[英語]

(40) breathe down someone's neck

- (① (人) にぴったり付く、しつこく付きまとう、(人) をせきたてる ② 厳しく監視する、目を離さないでいる)

これらの慣用句において「首・neck」は、「人全体」を表していると考えられる。例えば、(39)「a. 首を揃える」は、「首」で人全体を表し、人がたくさん揃っている様子が句全体で表現され、「関係者が一堂に集う」という意味を表している。身体部位の[NECK]で、「人全体」を表すのは、2.2.2.で、メトニミーの例(6)「手が足りないから、手伝って」という表現において、「手」で「(手を部分として含む) 人間の体全体」を表していることから、部分—全体の関係に基づくメトニミーである(舩山, 2009, p.31)、と説明したのと同様である。この部分—全体関係に基づくメトニミーにより派生した「人全体」という比喩的意味に関しては日英で共通しているが、その用例は日本語のほうが多いようである。

VII. 比喩的意味：僅差

[日本語]

なし

[英語]

- (41) a. by the neck（僅差で）
b. neck and neck（接戦で、互角に）

(41) の慣用句において、“neck” は「僅差」という比喩的意味を表していると考えられる。例えば、(41) a. by the neck で「僅差で」、b. neck and neck で「接戦で、互角に」という意味を表す。多田 (1981, p.227) によると、“neck and neck” は競馬用語のひとつであるという。馬がいずれ劣らず相並んで疾走するありさまが語源になっている (多田, 1981, p.227)。そのありさまを想像するに、並んで疾走する馬のどちらが前を走っているか、その差が馬の [NECK]+[HEAD] の長さ程の差しかない様子であると思われる。よって、英語の “neck” にもまれに、[NECK]+[HEAD] を表すことがあるといえるが、その身体部位はあくまで馬のものである。英語の “neck” が「僅差」を表すのは、「並んで走る 2 頭の馬の距離の差がわずかであること」との類似性に基づくメタファーであると考えられる。

5.2. 「首・neck」を含んだ慣用句が句全体で表す比喩的意味（句レベルでの分析）

前節では「首・neck」を含む慣用句の構成語「首・neck」の比喩的意味を分類するという語のレベルでの分析を行った。続いて、慣用句全体で表される比喩的意味を分類するという、句レベルでの分析を試みる。この節では、個々の構成語は文字通りの意味を表しているのに、慣用句全体の意味がその総和からはかけ離れている慣用句を対象として、その慣用句はどのような比喩的意味を表しその意味はどのように生じたか、日英の慣用句の比喩的意味にどのような共通点・相違点があるかを明らかにすることが目的である。

句全体で文字通りに表される具象は大きく分けて、5.2.1.「身体部位の形状や状態の変化」と5.2.2.「身体部位を用いた行為、身体部位への行為」がある。

5.2.1. 句全体の文字通りの意味：身体部位の形状や状態の変化

句全体で文字通りに表された具象「身体部位の形状や状態の変化」から生じた慣用句の比喩的意味を分類すると以下ようになる。それぞれの比喩的意味をもつ慣用句の例とその慣用句の意味を（ ）で書く。

Ⅷ. 比喩的意味：感情

[日本語]

(42) a. 鶴首して待つ (よい知らせや待ち人を待ちわびるさま)

b. 首を長くする (待ち遠しいさま)

[英語]

(43) rubberneck

(やじ馬、物珍しそうに見る)

日本語の(42)の例文と英語の(43)の例文はどちらも「[NECK]の形状の変化が起こる出来事」でそれと時間的に同時に起こる「感情」をあらわすメトニミーであるといえる。ただし、日本語の「首を長くする」と英語の“rubberneck”は、文字通りには似たような身体部位の形状の変化（[NECK]が伸びた様子）を表すにも関わらず、その意味する「感情」の内容は、全く異なる点は興味深い。

IX. 比喩的意味：命・職の危機

[日本語]

(44) a. 首の皮一枚（ごく小さな可能性がまだ残っている）

b. 首が繋がる（職などをやめないですむ）

c. 首を繋ぐ

d. 首が飛ぶ（免職・解雇される）

日本語の(44)の慣用句の意味は、文字通り表される「身体部位の状態」と、「命・職の危機がせまる状態」に類似性を見出したメタファーによって生じた意味と考えられる。例えば(44)「a. 首の皮一枚」は、文字通りには、[HEAD]と胴体が[NECK]の皮のみでかろうじて繋がっている様子を表している。その具象から、「命・職の危機」が推測され、「ごく小さな可能性が残っている」という意味が生じている。

X. 比喩的意味：自由が利かない様子

[日本語]

(45) 首が回らぬ（借金が多くて、どうにもならない）

[英語]

(46) a. up to one's neck (①どっぷりつかって②(借金)で身動きが取れなくて、首が回らない③仕事をいっぱい抱えて、忙殺されて)

b. pain in the neck (いやな、うるさい人間、事柄)

(46) a. の例文 “up to one's neck” は、「①どっぷりつかって ②（借金）で身動きが取れなくて、首が回らない ③仕事をいっぱい抱えて、忙殺されて」という意味を表す。この意味は、「[NECK]の高さまで浸かっている」という文字通りに表される様子から推測されたもので、「自由が利かない」という類似点を認識したメタファーである。この字義通りの意味は、日本語の「首っ丈」という慣用句に近い表現であるが、その比喩的意味は日本語の慣用句の「首が回らない」に近い点は興味深い。

XI. 比喩的意味：人が集まる様子

[日本語]

(47) a. 雁首を揃える（多くの人が集まる様子）

b. 鳩首会談（人々が集まって相談すること。多くの人額を寄せて話しあう様子）

c. 首を揃える（関係者が集まること）

これらの慣用句は、先に述べたとおり、構成語「首」が部分—全体関係に基づくメトニミーにより「人全体」の意味に拡張している。さらにそれだけではなく、他の構成語と結合することで、その「人」がたくさん集まっている様子を比喩的に表している。例えば(47)「a. 雁首を揃える」は、雁という野鳥が群れている様子に、人がたくさん集まっている様子を例えて軽蔑を含めて表現されている。

以上のことをまとめると、慣用句で文字通りに表された「身体部位の形状や状態の変化」を基に、句全体で、日本語では、「感情」、「命・職の危機」、「自由が利かない様子」、「人が集まった様子」が、英語では、「感情」、「命の危機」、「自由が利かない様子」が比喩的に表されることで、その慣用句の意味が生じていると考えられる。

5.2.2. 句全体の文字通りの意味：身体部位を用いた行為、身体部位への行為

XII. 比喩的意味：感情

(48) a. 首を傾げる（疑いや不思議さを感じる）

b. 小首をかしげる

c. 思案投げ首（深く考え込むこと）

d. 首を縦に振る（賛成するようす）

e. 首を突っ込む（興味をもって、積極的にかかわる）

f. 首を振る（賛成しない。承知しない）

これらは、「身体部位を用いた行為、身体部位への行為」で、それと時間的に同時に起こる「感情」をあらわすメトニミーであるといえる。例えば、(48)「a.首を傾げる」は、「疑いや不思議さを感じる」さまを意味する。人がそのような感情をもつ時よく、[NECK]+[HEAD]を横に傾げる仕草をする。そのような視覚的に捉えられる仕草を表現することで、それと時間的隣接関係にある「感情」を表すメトニミーの働きによって、その慣用句の意味が生じている。

XIII. 比喩的意味：命・職の危機

[日本語]

- (49) a. 首を洗って待つ（打ち首の場所に座り、処刑されようとする）
b. 首を切る（解雇にする）
c. 首をくくる（自殺する。首を吊る）
d. 寝首を搔く（人の油断に乗じて、卑怯なはかりごとで陥れる）
e. 真綿で首を締める（遠まわしにじわじわ責めたり痛めつけたりすること）
f. 首を吊る（自殺する）
g. 鬼の首を取ったよう（悪事の限りを尽くしていた鬼を退治して、その首を取った人のように、得意の絶頂にあるさま）
h. 首狩り（ある社会で宗教的儀式を行うとき、神に捧げるいけにえとして、他部族の人の頭をとること）

[英語]

- (50) a. stick one's neck out（あえて危険を冒す）
b. get it in the neck（①首切りの刑に処せられる ②厳しく罰せられる ③大打撃を受ける ④解雇される）

これらは、文字通り表される「身体部位を用いた行為、身体部位への行為」からメタファー、メトニミーにより意味が拡張し、「命・職の危機がせまる状態」を意味する慣用句である。例えば、(49)「b.首を切る」は、文字通りには、身体部位[NECK]が切られることを表すが、その行為と「解雇する」ことに、「生命の維持を左右する行為」という類似点を認識したメタファーである。また(49)「c.首をくくる」は、字義通りの「[NECK]を紐などでくくる」という行為で、それと時間的に隣接関係にある「自殺する」という

行為を表すメトニミーである。

XV. 比喩的意味：自由が利かない様子

[日本語]

- (51) a. 首に縄を付けても（強制的に何かをさせる）
- b. 首根っこを押さえる（相手の弱点などを握って有無を言わせない状態にする）

これらは、文字通り表される「身体部位を用いた行為、身体部位への行為」と「自由が利かない様子」に類似性を見出したメタファーである。例えば、(51)「a. 首に縄を付けても」は、「[NECK]に縄をくりつけて無理矢理引き連れる様子」が字義通りに表されており、その様子と、強引に何かをさせる行為に、「自由を利かせないで言うことを聞かせる」という共通点があるために文字通りの意味と慣用句の意味がリンクする。

以上のことをまとめると、慣用句で文字通りに表された「身体部位を用いた行為、身体部位への行為」の意味が、メタファー、メトニミーにより拡張し、句全体で日本語では、「感情」、「命・職の危機」、「自由が利かない様子」が、英語では、「命の危機」を表すようになっていく。

6. 考察と結論

この研究は、身体部位詞「首・neck」を考察の対象として、日英慣用句の中でこれらの構成要素がどのような比喩的意味を示しているか、また、慣用句全体で表される文字通りの意味がどのように拡張してその慣用句の意味を表すようになったかを明らかにすることを目的として行われた。その結果、まず構成要素「首・neck」は慣用句において図3、4のような比喩的意味を表すことが分かった。

日本語の「首」は、本来身体部位の[NECK]を表すが、慣用句においては「命・職」、「解雇」、「身体部位[NECK]+[HEAD]」、「最初」、「人全体」という意味に拡張する。それに対し、英語の“neck”は、「命」、「人全体」「僅差」という意味に拡張する。日本語と英語の「首・neck」の表す比喩的意味を比較すると、その最も大きな相違は、日本語の「首」の意味は部分—全体関係に基づくメトニミーにより拡張され、身体部位[NECK]だけでなく、[NECK]+[HEAD]を表しているということである。それにともなって「首」という語は、[NECK]+[HEAD]の意味からメタファーによりさらに拡張し「最初」という意味も持つ。

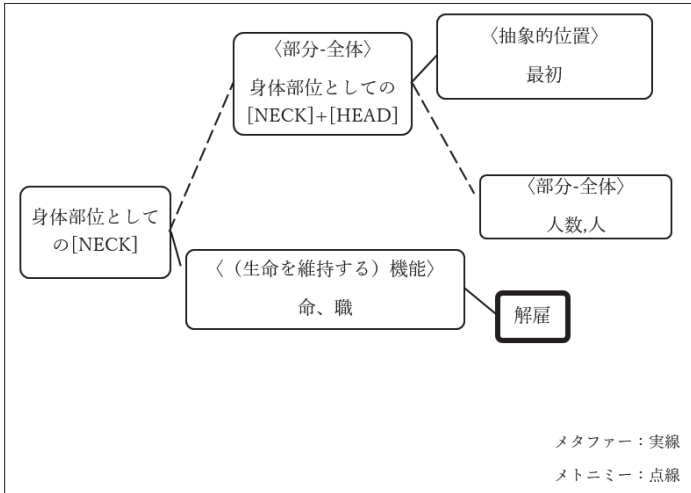


図3 日本語の「首」の慣用句における比喩的意味のネットワーク

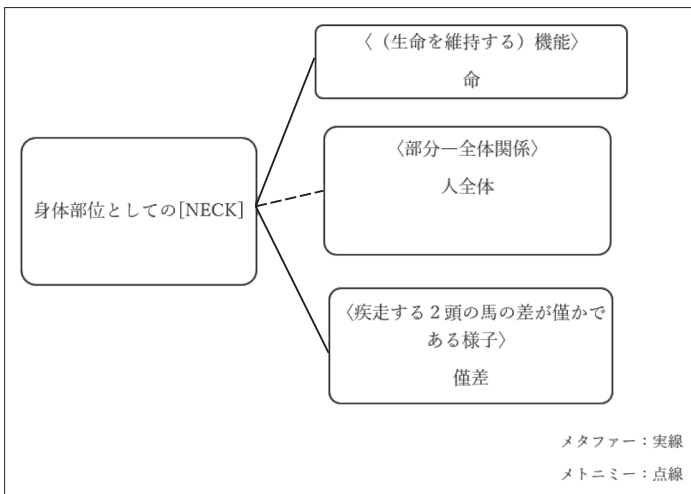


図4 英語の“neck”の慣用句における比喩的意味のネットワーク

また日本語の「首」も英語の“neck”も、身体部位[NECK]の「生命の維持を左右する機能を持つ」という側面に焦点を当てて意味が拡張しているという点では共通であるが、日本語の「首」は、「命、職」とどまらず「解雇」という意味を表す点で、拡張の

範囲が英語の“neck”より広いと言える。

次に、構成要素の「首・neck」は比喩的意味を表している訳ではない慣用句、もしくは構成要素の比喩的意味だけでは慣用句全体の意味が説明できない慣用句については、句レベルでの意味拡張を分析した。これらの慣用句は、慣用句全体で表される文字通りの意味がメタファー、メトニミーによって拡張され、慣用句全体の意味が生じていることが分かった。句レベルでの意味拡張について日英両言語を比較すると、[NECK]の「形状」や「命を左右する機能を持つ」という側面、「自由をつかさどる部位である」という側面に焦点を当てた意味拡張が多い点で類似している。ただし、同じ字義通りの意味から、それぞれの言語で全く異なる意味への拡張も見られた。

総じて、日英の「首・neck」を含む慣用句において、語レベルで「首・neck」の比喩的意味は、日本語の「首」の方が英語の“neck”よりより広範囲まで意味が拡張しており、その最大の要因は日本語の「首」が[NECK]だけでなく[NECK]+[HEAD]も意味することにあると考えられる。また句レベルでは、身体部位[NECK]の「形状」「(生命の維持を左右する)機能」「自由をつかさどる部位である」という側面に焦点を当てて、文字通りの意味から慣用句の意味へと意味拡張している点が日英両言語間で類似していることが明らかになった。

参考文献

- 石田プリシラ (2015) 『言語学から見た日本語と英語の慣用句』 開拓社
- 伊藤眞 (1997) 「第7章 言語の具象性・比喩性・受動性～日・独慣用句をめぐって～」筑波大学現代言語学研究会『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社 pp.249-297
- 伊藤眞 (1998) 「構成要素の比喩的意味について―日独慣用句の身体部位を中心に」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書Ⅱ平成10年 PART Ⅱ』筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織 pp.763-788
- 稲垣和也 (2015) 「メタ言語」斎藤純男・田口善久・西村義樹『明解言語学辞典』三省堂 p.218
- 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明 (1989) 『日本語大辞典』講談社
- グリニス・チャントレル (2016) 『オックスフォード英単語由来大辞典』 株風舎
- 講談社辞典局 (2000) 『これは使える「体ことば」辞典』 講談社
- 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (2015) 『明解言語学辞典』三省堂
- 上代語辞典編修委員会 (1967) 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂
- 白川静 (2005) 『新訂字訓』 平凡社

- 大東文化大学中国語大辞典編纂室 (1994) 『中国語大辞典』 角川書店
- 多田幸蔵 (1981) 『英語イディオム事典〈身体句編〉』 大修館書店
- 東郷吉男 (2003) 『からだことば辞典』 東京堂出版
- 中島文雄・寺澤芳雄 (1981) 『英語語源小事典第5刷』 研究社
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室 哲学者と学ぶ認知言語学』 中央公論新社
- 西村義樹 (2015) 「参照点」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 『明解言語学辞典』 三省堂 p.100
- 西村義樹 (2015) 「認知言語学」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 『明解言語学辞典』 三省堂 pp.176-177
- 野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』 ひつじ書房
- 平沢慎也 (2015) 「多義性」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 『明解言語学辞典』 三省堂 p.147
- 武信彰 (1998) 『プログレッシブ中国語辞典』 小学館
- 方小贊 (2011) 「日本語と中国語における「首」を含んだ慣用句の比較」 『宇都宮大学国際学部研究論集』 第31号 pp.137-150
- 堀江薫、ブラシャント・パルデシ (2009) 『〈講座 認知言語学のフロンティア⑤〉 言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ—』 株式会社研究社
- 室町時代語辞典編修委員会 (1985) 『時代別国語大辞典 室町時代編一』 三省堂
- 室町時代語辞典編修委員会 (1989) 『時代別国語大辞典 室町時代編二』 三省堂
- 糊山洋介 (2009) 『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語』 研究社 pp.24-34
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房
- J・ザイドル、W・マクモーディー著、堀内克明訳 (1978) 『オックスフォード 現代イディオム活用辞典』 オックスフォード大学出版局株式会社
- Julia Cresswell (2010) Oxford Dictionary of Word Origins
- Langacker, Ronald. W. (1993). Reference-Pont Constructions. *Cognitive Linguistics* 4, p.1-38

参考 URL

- 国立国語研究所 『中納言コーパス』 〈<http://chunagon.nnjal.ac.jp>〉 2017年11月30日閲覧
- JapanKnowledge 「くび【首・頸】」 『日本国語大辞典』 〈<http://japanknowledge.com.webvpn.cs.twcu.ac.jp>〉 2017年11月25日閲覧
- JapanKnowledge 『古事類苑人部 洋巻 第1巻』 P.319 〈<http://japanknowledge.com.webvpn.cs.twcu.ac.jp>〉 2017年11月25日閲覧

Abstract

The purpose of this study is to clarify the differences between the idiomatic use of the word *neck* in Japanese and English. There are a lot of idiomatic expressions referring to the human neck in each language and neck idioms are often generalized beyond that of referring to the meaning of the specific body part in each language. However, the way these body parts are referred to differs between the languages. For example, *to shake one's head* (meaning “no” in English) is different to *kubi wo furu* which literally means *shake one's neck* in Japanese.

This thesis investigates the above expressions from a cognitive linguistic point of view, focusing upon the use of metaphor and metonymy. Chapter 2 reviews previous studies of how cognitive linguistics has viewed the topic of body parts in its metaphor theory, and explains why the theory is of relevance to this study.

Chapter 4 investigates the origin of the words in each language. As shown in Fang (2010), it is noted how the Japanese word *kubi* (首) took over the semantic extension to include the concept of *head* by the influence of the Chinese character for head (首). Chapter 5.1 illustrates the semantic extension of the word *neck* in idioms, and classifies its figurative meanings on a lexical level. Chapter 5.2 further investigates the neck expressions on an idiomatic level.

In conclusion, from the analyses of Chapter 4 and Chapter 5, it was found that the Japanese word *kubi* has more meaning than that of the English word *neck*, because the concept *kubi* covers not only the neck area of the body but also the head.